

## 初期近代における「雑録」の伝統と実践

——モンテーニュ『エッセー』の特異性——

山 本 佳 生

### はじめに

初期近代において生徒や学生たちが行っていたノート作成方法、すなわち文章を抜粋し、見出し語のもとに配列する方法を「ロキ・コムーネス」の方法と一般化して呼ぶことが許されるのであれば、この方法はまさしく情報管理を目的としており、「ロキ・コムーネス」すなわち見出し語はそのためのツールであるといえる。詩、格言、ことわざ、一般的に受け入れられている意見や論証といったテキスト情報を、主としてモラルに関係する「徳」、「名誉」、「寛大さ」などの汎用的な見出し語によって整理し、将来的な利用のために管理する。この方法は政治的対立、宗教的党派性をこえて人々のあいだに広まり、十六世紀の「共通の教養」であったといっても過言ではない<sup>(1)</sup>。

ところで、初期近代においては、読書から得られた情報を集め、保存する文芸ジャンルが人気を得る。「雑録 *miscellanea*」と分類されるそれは、同じように情報の収集と保存を行なった中世の詞華集とはまったく無縁のものだ。むしろ、それは古代末期のアウルス・ゲッリウス『アッティカの夜 *Noctes Atticae*』に端を発している。とりわけコモンプレイスブック——「ロキ・コムーネス」の方法を適用した引用句集成——の流行の裏で、このジャンルの開花が見られた。「雑録」はコモンプレイスブック同様、古典著作の読書から得たものを書きとめ、それを印刷、出版したものであるが、見出し語による整理や体系的記述を欠いているという点で異なっている。

このように「雑録」とコモンプレイスブックは、配置の点では異なるが、引用を収集、保存するという方向性において共通点を持つ。ところで、モンテーニュの『エッセー』はしばしば「雑録」としてみなされる。本稿において「雑録」との関係性を考察することは、『エッセー』とコモンプレイスブックとの関係性を考えることと無関係ではなく、むしろ補完的であるといえる。というのも『エッセー』と「雑録」の共通点や差異を精査することによって、コモンプレイスブックとの

---

(1) この点についてエラスムス『寓意集 *Parabolae*』の出版史と関連させ、特にパーゼルの人文主義者たち(リュコステネスやツヴィンガーなど)の活動がそうした教養の普及を担っていたことを論じているのが、J.-C. Margolin による *Parabolae* の解説である。ASD, I-5, pp. 34-47, in *Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami : recognita et adnotatione critica instructa notisque illustrata*, Amsterdam, North-Holland, 1969.

関係性も浮かび上がらせることができるからだ。

手順としては、まず「雑録」をその歴史から振り返り、こういった特徴があるのか見ていく。その際に、「雑録」に分類されるものの大半が「読書録」というタイトルもしくは内容をそなえていることが明らかになるだろう。またそれらは「注釈」という文献学的な作業と類似性を示すことから、当時の注釈がどのようなものであったか確認することも忘れずに行なう。そして次に、「読書録」と「注釈」の特徴を兼ねそなえた書物、ルネサンス最大のベストセラーともいえるエラスムスの『格言集』に注目したい。最後に、しばしば「雑録」として受け入れられることもあるモンテーニュの『エッセー』について、特にその構成の乱雑さや話題の多様さという観点から接近を試みたい。

## 1. ルネサンスの読書録と注釈

### ゲッリウスの遺産

古典語や古代文化について、ときには文献学的に、ときには哲学的に自分の思ったこと、気がついたこと、興味深いことを書き連ねたものの集成、これこそがアウルス・ゲッリウス『アッティカの夜 *Noctes Atticae*』だとひとまず言うことができる。彼が序文において呈示する著作の特徴はその後の雑録の理解に大いに役立つだろう。したがってまずゲッリウスの言うところを見てみよう。

私がギリシャ語かラテン語の書物を手に過ごす際、記憶に留めるに値すると思われた文章に気づいたときには、いかなる種類の書き物であれ、区別も順序もなしに気に入ったものに印をつける。そうすることで記憶の助けとなり、いわば文学的な備蓄の代わりとなる。これは、もしある出来事や話題を思い出さなくてはならなくなったときや、運悪くそれらを忘れてしまったとき、それらの抜粋元である書物が手元にないときなどに、それらを容易に見つけ出し、使えるようにするためである<sup>(2)</sup>。

そして、このように書き留められた記憶に値する言行に対するコメントの数々をゲッリウスは一冊にまとめたのだという。そのコメント（のちに「注釈」というジャンル自体を考察するので、この語はあえて使わずにおく）は色々な学説や様々な読書を通じて得られた、順序も気取りもな

---

(2) Aulus Gellius, *Noctes Atticae*, *Præfatio*, 2, « Nam proinde ut librum quemque in manus ceperam seu Græcum seu Latinum uel quid memoratu dignum audieram, ita quæ libitum erat, cuius generis cumque erant, indistincte atque promisce annotabam eaque mihi ad subsidium memoriae quasi quoddam litterarum penus recondebam, ut, quando usus uenisset aut rei aut uerbi, cuius me repens forte obliuio tenuisset, et libri, ex quibus ea sumpseram, non adessent, facile inde nobis inuentu atque depromptu foret. »

い簡潔なものだ<sup>(3)</sup>。

ここから読み取れるのは次の二つの特徴である。「区別も順序もなしに (*indistincte atque promisce*)」書きとめること、すなわち、偶然の配列 (*ordo fortuitus*) と、ギリシャ、ラテンを問わない扱われる題材の多彩さ (*varietas*) である。ルネサンスに入ってこの『アッティカの夜』が再発見されるに伴い、これらの特徴も人々を魅了し、「雑録」というジャンルを形成した<sup>(4)</sup>。ところで、このジャンルには、古典作品の再発見の作業に付随するものが新たに特徴として付け加わる。それは文献学的あるいは博学的なコメントである。

#### 「異本 *lectio varia*」から

最初に「雑録 *miscellanea*」という言葉を作品のタイトルに付けたのは、十五世紀イタリアの人文主義者、アンジェロ・ポリツィアーノだとされる。1489年に出版された『雑録第一巻 *Miscellaneorum centuria prima*』は、(ラテン語の) 文法や語彙、テキストの「読み」に関わる問題や難解な箇所の説明など、文献学や文法学にかんする主題が集められている。続く第二巻を彼は死の間際まで書き続けていたが、結局、未完成のまま終わってしまった。この巻は文献学的主題を越えて、哲学や自然科学に対する関心を中心をなしている。ギリシャ、ローマの文明、宗教、文化はもちろん、エジプトのそれにまで言及するなど、古代世界全体に対する著者の興味があらわれているといえよう。

ところで、十五世紀イタリアやそれに続く十六世紀がどのような時代であったかといえ、古典テキストの再発見に対する情熱が人々を動かしていたときであった。サルターティやポッジョなどの有名な写本ハンターたちの活躍はもちろんであるが、ヴェットーリやオルシーニなどのテキストの校訂、つまりどれが正しい「読み」なのかを確定する文献学者たちの仕事も忘れてはならない。彼らは校訂の際に生じる写本とは異なる「読み」、つまり「異本 *lectio varia*」を見つけ出し、それについて検討することで、入念なテキスト読解をおこなった。この探求の過程を記述し、主題とすることがルネサンス期の「雑録」そして「読書録」の基本的な特徴となる<sup>(5)</sup>。

上記のポリツィアーノの場合も、第一巻は特にその傾向をあらわしている。だが我々にとって

(3) *Ibid.*, « *Facta igitur est in his quoque commentariis eadem rerum disparilitas, quæ fuit in illis annotationibus pristinis, quas breuiter et indigeste et incondite <ex> eruditionibus lectionibusque uariis feceramus.* »

(4) 古代からルネサンスまでの「雑録」の歴史と展開については J. M. Mandosio, « La miscellanée : Histoire d'un genre », in *Ouvrages miscellanés et théories de la connaissance à la Renaissance. Actes de la journée d'étude organisée pour l'École nationale des chartes, Paris, 5 et 6 avril 2002*, réunis par Dominique de Courcelles, Paris, École des chartes, 2003, pp. 7-36. ポリツィアーノの『雑録』については A. Grafton, *Defenders of the Text*, Cambridge, Mass., 1991, pp. 47-75, « The Scholarship of Poliziano and Its Context » ; P. Laurence, « La poétique du Philologue : Les *Miscellanea* de Politien dans la lumière du premier centenaire », in *Euphrosyne. Revista de Filologia Classica*, nova serie, vol. XXIII, 1995, pp. 349-367.

興味深いのは、献呈文において、アイリアノスやゲッリウス、アレクサンドリアのクレメンスといった作家たちを模倣したと述べていることだ。また序文においても、「事柄の新奇さ *novitas rerum*」や「優雅な多彩さ *varietas non illepidi*」が退屈を追い払ってくれるだろうと宣伝している。

そしてなによりもポリツィアーノにとって重要なのが、「多彩さ *varietas*」の概念である。この『雑録』において、それは引用される著者の多様さと論じられる主題の幅広さを意味している<sup>(6)</sup>。この概念の導入により「雑録」というジャンルの可動域が広がる。文献学的探求から哲学、自然科学にいたるまで、あらゆる学問領域に対する関心が主題として許容されるのだ<sup>(7)</sup>。

### 「読書録 *lectiones variæ*」へ

「読書録」という言葉が広まる契機となったのが、フェラーラでレトリックの教授をしていたカエリウス・ロディギヌスの『古典読書録 *Lectiones antiquæ*』である。この題名はゲッリウスが序文で言及したカエセリウス・ウィンデックスの著作（ルネサンス期にはすでに失われていた）に由来するという。扱われる主題は古代の文章表現やその背景にある文化、習慣などの事柄であり、それらはしばしば文献学的関心を越えることもあった。短い章ごとに内容が分かれており、それぞれはほとんど無関係か、少しばかりの連想によってつながっている。見出し語やタイトルによって内容が整理されることはなく、かき集められ、無造作に並べられているのが見て取れるだろう<sup>(8)</sup>。

このロディギヌスの著作以外にアレクサンドル・アブ・アレクサンドロ『祝祭の日々 *Dies geniales*』やペドロ・メシア『様々な読書の森 *Silva de varia lección*』なども当時よく読まれた読書録だ。前者はロディギヌスのものよりも専門性が高く、古代ローマの法と社会構造についての注釈的な散文の集成である。ただし直接的な引用も出典の明示もない。後者のメシアのものは、各俗語への翻訳、模倣によってヨーロッパ中に広がり人気を博していた（1540年に初版。1551年の第九版が著者の生前最後の版となる。翌年には仏訳が出るなどその人気ぶりがうかがえる）<sup>(9)</sup>。内容面を見てみれば、四部構成のうち、第一部の歴史的出来事にかんする主題から第四部の事物

(5) R. Mouren, « La *varietas* des philologues au XVI<sup>e</sup> siècle : entre *varia lectio* et *variæ lectiones* », in *La Varietas à la Renaissance, Actes de la journée d'étude organisée pour l'École nationale des chartes, Paris, 27 avril 2000*, réunis par Dominique de Courcelles, Paris, École des chartes, 2001, pp. 5-31.

(6) こうしたポリツィアーノにおける「多彩さ」については J. M. Mandosio, « La 'docte variété' chez Ange Politien », in *La Varietas à la Renaissance, op. cit.*, pp. 33-41.

(7) ルネサンス期の百科全書書物については J. Céard, « Encyclopédie et Encyclopédisme à la Renaissance », in *L'Encyclopédisme. Actes du colloque de Caen, 12-16 jan., 1987*, éd. Annie Becq, Paris, Klincksieck, 1991, pp. 56-67. 百科全書と雑録の類似と差異については Neil Kenny, *The Palace of Secrets : Béroalde de Verville and Renaissance Conceptions of Knowledge*, Oxford, Clarendon Press, 1991.

(8) この著作については Blair, *op. cit.*, pp. 128-129 ; Moss, *op. cit.*, pp. 98-99.

や存在の起源についてまで多岐にわたる事柄が論じられている。地理学者、天文学者でもある著者の見識が活かされているだけでなく、当時の有名な集成のほとんど（大プリニウスやワレリウス・マクシムスをはじめとして、ラウシウス・テキストルや前述のアブ・アレクサンドロなど）を参考にしていることによって、さらに主題の範囲を拡大している。また、熱心なカトリック教徒としてメシアは聖書や教父からの引用も多く行っているのも特徴的だ。

このようにルネサンス期の読書録は文献学的探求にはじまり、百科全書的知識にまでその範囲を拡大する。一つ一つの作品を細かく見ることはここでの課題ではないが、各著者たちが一冊の本のなかに豊富な話題を詰め込もうとしている姿勢は明確に見て取れるであろう。だが、他方で本来の文献学的要素を、注釈とは異なる形で記述した著作もある。その好例がアドリアン・チュルネーブの『覚え書き *Adversaria*』である。

#### アドリアン・チュルネーブ『覚え書き *Adversaria*』

直接的にタイトルが示しているわけではないにせよ、チュルネーブの『覚え書き』は読書録の範疇に入れられるだろう。もともと彼はこの題名を考えておらず、出版元の意向で決まったようである<sup>(10)</sup>。この「*adversaria*」という語は「注意を向けるべき事柄に印を付けた紙や冊子」を指す。その印は「記憶の補助、いわば忘却の彼方に何も落ちないように」するために付けられるという。この見解はキケロに基づくものであり、この著作でおこなわれていることも実際それに大筋で沿うものだ<sup>(11)</sup>。チュルネーブは基本的にテキストの修正 *emendatio* と難解な箇所の説明 *explicatio* を行なう。そのプロセスは以下のように多岐にわたる。対象となる著者の発想や思想から他のテキストを連想する方法（思想内容の把握によるもの）や、目立つ言語表現に注目し、そこから考察を広げる方法（テキスト校訂によるもの）、あるいは対象テキストの成立過程や著者の置かれた状況から解釈を行なう方法（歴史的文脈の再構成によるもの）などが挙げられるだろう。これらは一見、「注釈 *commentaire*」の作業方法と似ているが、異なる点としては、読書の対象となるテキストを読む側が自由に選択でき、頭に浮かんだ内容を自由に書き留めているという点だ<sup>(12)</sup>。つまり、選択と記述の自由が注釈とこの著作を分ける点なのである<sup>(13)</sup>。一つのテキストではなく、多数のテキストに対する関心、そして厳密な規則や体系にしたがうことなく、連想のまま記述し、それらを無造作に並べた構成はまさにゲッリウスの遺産を引き継いでいると

(9) メシアのこの著作については D. De Courcelles, « Le mélange des savoirs : Pour la connaissance du monde et la connaissance de soi au milieu du XVI<sup>e</sup> siècle dans la *Silva de varia lección* du Sévillan Pedro Mexía », in, *Ouvrages miscellanées et théories de la connaissance à la Renaissance*, op. cit., pp. 103-115 に負っている。

(10) J. Lewis, *Adrien Turnebe 1512-1565, A Humaniste Observed*, Genève, Droz, 1998, pp. 200-201.

(11) *Adversariorum tomus primus*, II, 11, Paris, G. Buon, 1564, f. 29, « *Adversaria quæ M. Tullius nominat, videntur libelli fuisse et commentarioli et chartæ, quæ homines advertabant, et (ut ita dicam) memoralia erant, ne res aliqua eis excideret.* »

いえよう<sup>(14)</sup>。

この作品において重要なのは、その目的である。チュルネーブは厳密な文献学的注釈や、自身の博識、広大な関心を示すために書いたわけではない。むしろこれは余暇 *otium* の手すざびとしての側面が強く、公的生活の喧騒から離れた文人が、教養のある友人たちに読んでもらうために書かれたものだ。もちろん学問的な情熱がないわけでもないが、その博識を世間にひけらかすのではなく、友情で結ばれた相手に向けて書くという慎み深さがこの作品を特徴づけている<sup>(15)</sup>。だが驚くべきことに、こうした個人的関心にしがたって書かれた著作と同じくらい、同時代の注釈も主観的な記述が目立つ。当時の注釈は我々が思い浮かべるイメージとはかなり異なっており、ここでその実相を把握することは今まで見てきた「読書録」との類似と差異を明確にするのに役立つにちがいない。

### ルネサンス期の注釈

1532年にフアン・ルイス・ヴィヴェスが出版した『話し方について *De ratione dicendi*』のなかで二種類の注釈が紹介されている。一つ目は、注釈対象となるテキストが呈示する主題を議論するもの、もう一つは注釈者が生み出すもの自体を試験にかけられる注釈である。前者は「短い注釈」と呼ばれ、そこでは難解な文章の説明、典拠の明示などいわゆる文献学的な注釈がなされる。他方の後者は、「長い注釈」であり、呈示された主題について注釈者が試論をおこなうものだ。この後者の特徴は主題に対し脱線的で、主観的な記述が許容されていることである。「注釈」といったときの現代におけるイメージと全く異なるものがここにある。それは注釈者による情報の補足や説明といった一方的なものではなく、過去のテキストないしはその著者と注釈者のあいだでおこなわれる一種の対話ともいえる<sup>(16)</sup>。

---

(12) チュルネーブは1564年七月付けのミシェル・ド・ロピタル宛献呈文（これは1564年のエディションには載せられておらず、チュルネーブの死後版である1580年版にはじめて現れる）において次のように言う。Adrien Turnèbe, *Adversariorum libri triginta, in tres tomos divisi*, Paris, Martin le Jeune, 1580, f° a2. « *Ut quemque librum prehenderam, quicquid ex tempore subitoque mentem veniebat, tumultuaria scriptura comprehendebam.* » 「私の手元に本があり、頭に何か浮かんだら、すぐさま私はそれを急いで書き留めたのだった」。

(13) J. M. Chatelain, « Les recueils d'*Adversaria* aux XVI<sup>e</sup> et XVII<sup>e</sup> siècles : Des pratiques de la lecture savante au style de l'érudition », in *Le Livre et L'Historien. Etudes offertes en l'honneur du Professeur Henri-Jean Martin*, réunies par Frédéric Barbier et al., Genève, Droz, 1997, pp. 180-182.

(14) *Adversariorum tomus primus*, I, 31, Paris, G. Buon, 1564, f. 20, « *Hæc ergo carptim vellicatimque hinc inde collegi, ut in mentem quicque veniebat huic allinens capiti. Sic enim mihi capita crescunt, varia tanquam consarcinando, ut centonum imitari videar sutelam.* » 「それゆえこれらは私があちらこちらから集めたとりとめのない断片であり、私の頭に浮かんだままこの章に並べたものだ。このように、様々な断片を一つに縫い合わせることで私の章は長くなり、結果として引用の寄せ集めを真似したようになった」。

(15) Chatelain, *art. cit.*, pp. 183-186. この「文学的余暇 *otium litteratum*」もまたゲッリウスからポリツィアーノが引き継いだものである。Cf. Lewis, *op. cit.*, pp. 200-201, n. 176.



ところでこうした注釈者による試論にもいくつか種類があり、大別すると次の三種類に分けられる。これはルネサンス期にお馴染みの「言葉 *verba*」と「事柄 *res*」の関係性に基づいて区分されたものだ。第一に「言葉」つまり語彙や表現に集中した注釈。次に「言葉」のみならず、それらによって表される概念的事柄も記述するもの。最後に、具体的事柄の記述、つまり「事柄」の説明を特に重視した注釈である。

第一の注釈の例としてニコロ・ペロッティ『豊穡の角 *Cornucopia*』が挙げられる。これはマルティアリスの風刺詩の注釈であり、その目的は各詩行の意味を明確にすることよりも、詩を構成している各語の検討に置かれている。すなわち、語の系統、同義語、類音語についての研究が大半を占める。ペロッティはこうした語彙についての記述をマルティアリスの詩の順番と同じにしているが、もしそれらをアルファベット順に並べなおせば、それはほとんど辞書と同じ役割を果たすだろう。事実、同時代のカレピーノの辞書はこのペロッティの注釈に多くを負っていることを隠さなかった。また、ロベール・エチエンヌの『ギリシャ語宝典』もこうした語彙研究の延長線上にあるのは明らかである。

二番目の注釈のタイプは、語彙や表現についての記述とその概念を検討するものであるが、これはエチエンヌ・ドレの『ラテン語註解 *Commentaria linguae latinæ*』がその例として挙げられる。第一巻では同義語や語の形成過程の類似について検討し、その後の第二巻においては語が形成する概念について説明を行なう（具体的には「戦争、航海、農業、天体、身体」の見出しに分け、それらに関連する語を検討する）。こうした注釈は具体的な事例については言及せず、また語彙研究でもないので、まさに「言葉」と「事柄」のあいだに位置しているといえよう。

最後のものこそ「事柄」の探求に特化したものだ。例としてはギヨーム・ビュデの『古代貨幣考 *De asse*』がある<sup>(17)</sup>。これは一見論考のように見えるが、実は一種の注釈であり、概念的対象の記述ではなく、具体的な古代の貨幣とその尺度という「事柄」を扱ったものだ。ビュデの記述で特徴的なのは、単に結果を示すのではなく、自身の考察の過程を読者に見せる点である。この脱線の記述は、注釈者の探索過程の記録であり、個人的意見や思想を反映している。

このようにルネサンス期の注釈は多様である。読書録の主題が文献学的コメントから哲学や科

(16) ルネサンス期の注釈については多くの研究があるが、ここでは J. Céard の次の二つを参照した。« Les transformations du genre commentaire », in *L'Automne de la Renaissance 1580-1630*, XXII<sup>e</sup> colloque international d'études humanistes, Tours, 2-13 Juillet, 1979, études réunies par Jean Lafond et André Stegmann, Paris, J. Vrin, 1981, pp. 101-113 ; « Les mots et les choses : le commentaire à la Renaissance », in *L'Europe de la Renaissance : Cultures et Civilisations*, mélanges offerts à Marie-Thérèse Jones-Davies, Paris, Jean Touzot, 1988, pp. 25-36.

(17) この注釈における脱線的記述の役割について考察したのが, J.-Cl. Margolin, « De la digression au commentaire : pour une lecture humaniste du *De asse* de Guillaume Budé » in *Neo-Latin and the Vernacular in Renaissance France*, edited by Grahame Castor and Terence Cave, Oxford, Clarendon Press, 1984, pp. 1-25.

学にいたるまで広範にわたるのと同様に、注釈の主題もまた、語彙記述に集中したものから古代の事績についての研究まで幅広い。特に「事柄」の探求をおこなう注釈は読書録と著しく近似するであろう。だが、注釈は原則的に「一つの」テキストに対し語るものであり、他方の読書録はその点自由であり、複数のテキストについて同時に語ることが可能である。これが二つジャンルの差異である。

以上、我々は雑録ジャンルのうち特に読書録と呼ばれるものについて概観し、それと類似した注釈というジャンルについても触れることができた。ところで、主題の多彩さ、配列の乱雑さといった雑録の特徴を持ち、注釈のような脱線もときおり見られるエラスムスの『格言集』はいわばベストセラーになるほどの人気を博した。『格言集』はまた、その構成方法において「読書録」に接近する。というのも、両者は「要録 *chreia*」と呼ばれる、古人の言行を敷衍して語る古代以来の伝統とほとんど同じ方法を踏襲したものだからだ<sup>(18)</sup>。すなわち、まず格言や範例の呈示があり（それは同時に章や節のタイトルともなる）、次いで数行の導入。そして呈示された主題について他の作家からの引用が出典とともに並べられ、敷衍される。格言や範例に対する何かしらの結論や判断が示されることもなく、いわば主題の変奏（ヴァリエーション）が一つの章や節を構成する。読書録や『格言集』はこうした規則にしたがって書かれている。

このように構成方法や特徴を「読書録」と共有しつつも、『格言集』はどのように格言の集成としての特色を打ち出すことに成功しているのか、以下考察していきたい。

## 2. エラスムスの戦略

### 読書録的要素

1500年パリで出版された『格言集成 *Adagia collectanea*』は818の格言（すべてラテン語）を集めた、わずか76葉ほどのものであった<sup>(19)</sup>。のちの発展からすると比較的慎み深いこのエディションは、格言とそれについてのコメントを並べるという体裁をとっており、その点において、我々が今まで見てきた雑録や読書録との共通点を容易に見出すことができるだろう。とはいえ、そうした特徴は決定的な変容をなした1508年版以降も引き続き観察される。したがって、我々は一つのエディションに限定するのではなく、『格言集』という著作全体を考察の対象とする<sup>(20)</sup>。

---

(18) これについては Henri-Irénée Marrou の著作を参照のこと。 *Histoire de l'éducation dans l'Antiquité*, Paris, Seuil, 1948, t. 1, p. 260, « Bien que la brièveté soit toujours de règle, on commence ici à s'exercer au développement : le sujet est donné en deux lignes, le devoir complètement rédigé peut atteindre une petite page. [...] L'élève n'avance que pas à pas, guidé par un règlement rigide qu'il doit suivre, article par article. »

(19) 『格言集』の出版史については有名であるので簡潔に述べるにとどめるが、(i) *Adagia collectanea*, Paris, Jean Philippi, 1500 ; (ii) *Adagiorum Chiliades*, Venise, Alde Manus, 1508 ; (iii) *Adagiorum Chiliades*, Bâle, Froben, 1515 ; (iv) *Adagiorum opus*, Bâle, Froben, 1536が主要なエディションである。所収されている格言数もそれぞれ (i) 818, (ii) 3260, (iii) 3400, (iv) 4151と増加しているのが見て取れる。



まず注目すべきは引用される著者の多彩さである。古典のみならず、現代のピコ・デッラ・ミランダやポリツィアーノまで幅広く扱っている点は同時代の他の格言の集成と一線を画しているだろう。この点は1500年版のマウントジョイ卿宛献呈書簡においてエラスムス自身が次のように誇らしげに語っていることから明白だ。「このように優雅な仕事のために、夜なべのつらい作業を中断して、様々な権威ある著者たちの庭を飛び回り、このうえなく古く、そして優れた格言の数々を、まるでありとあらゆる種類の小さな花を摘むかのごとく収集し、花飾りを作るように並べてつなげたのです<sup>(21)</sup>」。ルネサンス期の人文主義者たちにはお馴染みの花飾りのメタファーを使いつつ、エラスムスは格言の多彩さとその美的価値を強調している。この多彩さは次の1508年版でギリシャの作家からの引用を大量に増やしたことでさらに強力なものとなるだろう。

他方で、格言へのコメントにも注目してみよう。一つの項は、最初に格言の呈示、そして意味の説明と出典についての言及、その後他の作家における類例を並べた文献学的な記述によって構成されている。それだけではなく、ときには歴史、文化、自然科学といった領域の知識を総動員して記述をふくらませる場合もあり、またときには個人的な意見を付け加えて記述を脱線させることもある。こうした脱線は当時の注釈の自由さを思い起こさせるであろうが、エラスムスにとってコメントは実際のところ、表現と知識のヴァリエーションを増やすことを目的としている。読者は類例を通じて見出しの格言以外に似た表現を獲得し、さらにそれらについての百科全書的な知識を得ることで、格言に対する理解が豊かになり、今度は自分で文章を書く際にそれらを役立てることができるようになる。ここにエラスムス的「多彩さ *varietas*」と「豊かさ *copia*」の理念の一端が見られるであろう。

次いで、配列方法も見てみよう。1508年版を準備するにあたり、エラスムスは小さなカードに格言を一つ一つ書きとめ、それらをアルファベット順に並べていたという。そして編纂段階においてそれらを意識的に乱雑に並べなおしたようだ<sup>(22)</sup>。乱雑とはいえ、一部はアルファベットの

(20) 『格言集』についての研究は多くあるが、一例として挙げるならば M. Mann-Phillips, *The Adages of Erasmus*, Cambridge, 1964 ; J. Chomarat, *Grammaire et rhétorique chez Érasme*, 2 vols, Paris, Les Belles Lettres, 1981, pp. 761-815 ; C. Balavoine, « L'Essence de la marjolaine, ou ce qui, de l'adage, retint Érasme », in *Forme brèves*, numéro thématique de *La Licorne*, Poitiers, 1979, n° 3, pp. 159-183 ; *id.*, « Les principes de la parémiographie érasmiennne », in *Richesse du proverbe, II, Typologies et fonctions*, éd. F. Suard et Cl. Buridant, Lille, Université de Lille III, 1984, pp. 9-23 ; C. B. Beuermann, « Le renouvellement de l'esprit par l'adage », in *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, tome XLVII, 1985, n° 2, pp. 343-355 ; J. Céard, « Le proverbe selon Érasme », in *Seizième Siècle*, 2005, n° 1, pp. 17-20. また、最近の Jean-Christophe Saladin による解説も参照。 *Les Adages*, sous la direction de Jean-Christophe Saladin, Paris, Les Belles Lettres, 2013, vol. 5, pp. 1-49, « La Révolution Humaniste ».

(21) *Les Adages*, éd. cit., vol. 1, « Lettres Liminaires », p. 1, « *Intermissis itaque gravioris operae lucubrationibus, hoc delicatioris studii genere per varios auctorum hortulos vagatus adagiorum vetustissima quæque maximeque insignia veluti omnigenos flosculos decerpsi et tanquam in sertum concinnavi.* »

逆順に並んでいたり、また一部は特定の文字からはじまる格言が並んでいたり、またテーマごとに並んでいる箇所もあったりするように、完全な無秩序を作るのではなく、むしろ緩やかなつながりを残しておくことで（悪く言えば中途半端に混ぜ合わせることで）単なる実用性を指すのではなく、読者に格言を続けて読む楽しみを与えている。「偶然の配列 *ordo fortuitus*」というよりも「乱雑な配列 *ordo confusior*」だといえる『格言集』は文学的、美的価値を追求した、同時代の「読書録」の一変種のようにみなすことができる。それゆえ実用的で学校教育的なコンプレイスブックや、語彙の知識を得るために体系的に整えられた辞書とは一線を画しているかのように見える<sup>(23)</sup>。とはいえ、『格言集』全体で見たときに索引という情報検索装置が付けられているのを忘れてはならない。

### 索引、あるいは「ロキ・コムネス」の一覧

1500年の『格言集成』のおよそ三倍近くの数の格言を所収している1508年版において、その量の多さゆえに読者は頁を繰りながら目当ての格言を見つけることが困難になった。そのために用意されたのが二種類の索引である。これらはエラスムス自身が作成したものだ<sup>(24)</sup>。一つは所収されている格言をアルファベット順に並べたものであり、もう一つは格言のテーマあるいはカテゴリー別に区分したものである。エラスムスは後者を「内容順の索引 *index secundum materias*」と呼び、「寛大さ」や「率直さ」、「勇氣」などモラルに関するものにくわえ、「類似と一致」、「不同と差異」など弁証術（論理学）のカテゴリーに近いものなど多岐にわたるトピックを並べる<sup>(25)</sup>。こうした見出し語（「ロクス」とエラスムスは呼ぶ）一つ一つに、複数の格言が配列されることで、索引ではありながら、さながらコンプレイスブックのような様相を呈している。見出し語の配列方法はエラスムス自身も明らかにしているように、類似（「大胆さ」と「勇氣」など）と対立（「富裕」と「貧窮」など）に基づくが、なんらかの規則性があるわけでもなく、「心に浮かんだまま」というように恣意的だ<sup>(26)</sup>。

たしかにこうした特徴から、索引自体も情報検索のための実用性よりも美学的な価値に重点を

(22) Chomarat, *op. cit.*, pp. 762-764 ; Balavoine, « Les principes... », *art. cit.*, pp. 17-18 ; *id.*, « Bouquets de fleurs et colliers de perles : sur les recueils de formes brèves au XVI<sup>e</sup> siècle », in *Les formes brèves de la prose et le discours discontinu (XVI<sup>e</sup>-XVII<sup>e</sup> siècles)*, études réunies et présentées par Jean Lafond, J. Vrin, 1984, p. 64.

(23) 主に前述の Cl. Balavoine がそうした立場を取っている。

(24) A. Vanautgaerden, « La lettre d'Érasme sur les index des Adages. Avec une édition et une traduction des trois versions de la lettre », in *Circuler et voyager. Les index à l'époque humaniste, Nugæ Humanisticae*, n° 2, 2001, pp. 35-46 ; *id.* et I. Diu, « Le jardin d'abondance d'Érasme : Le *De Copia* et la lettre sur les *Adages* non éditée par P. S. Allen », in *La Varietas à la Renaissance. Actes de la journée d'étude organisée pour l'École nationale des chartes, Paris, 27 avril 2000*, réunis par Dominique de Courcelles, Paris, École des chartes, 2001, pp. 43-55において1508年のヴェネツィア、アルド・マヌトゥス書店版、1515年パーゼル、フローベン書店版、そして引き続きフローベン書店の1528年版における読者宛ての序言を読むことができる。

(25) Cf. *Les Adages*, *éd. cit.*, vol. 5, pp. 75-229.

置いていると考えることも可能かもしれない<sup>(27)</sup>。見出し語の設定も、配列の順番もある程度の制約があるとはいえ厳密ではない。ここでもまたゲッリウスの遺産——多彩さと乱雑さ——が見出されるだろう。しかしながら、実際エラスムスが読者に求めているのは、これらの索引を使って容易に格言を探すことである。さらに、彼が強調するには、もし読者がより厳密で、より見出し語の数も多い索引を作成したければ、1512年の『言葉と内容の豊かさ』の第二巻でその方法をすでに示している、という<sup>(28)</sup>。つまり、エラスムスはあえて完全な索引を作らず、読者自身がそれを強化することを望んでいるのだ。彼は最終的に、読者がこれらの索引から利益を引き出したければ、見出し語の配列を何度も読むよう呼びかけている<sup>(29)</sup>。ここから読み取れるのは、乱雑さへの偏愛ではなく、むしろ教育的な助言である。索引を使って必要な情報を検索するのにくわえ、そうした索引自体をみずから作成できるようになることが読者には求められているのだ。したがって『格言集』の意義はこの教育的側面にある。エラスムス自身の教養を開陳するのではなく、読者が将来的に自分自身で似たような集成を作成するときに役立つ方法を、いわば見本として呈示しているのだ。この観点から改めて著作の要素を見直すと、話題や知識の多彩さは読者の関心に対応しながら、新たな話題を追加する自由を与える一方、他方の乱雑さもまた、読者が自由に模倣する余地を残している。目指されているのは、読者がこうした方法を学びつつ、多彩な話題を収集し、「豊かさ *copia*」を実現することにはほかならない<sup>(30)</sup>。

(26) AD LECTOREM, 1515, « *Index Chiliadum iuxta locos & materias, ut tum forte venerunt in mentem* », in A. Vanautgaerden, *art. cit.*, p. 41.

(27) Cl. Balavoine, « Les principes... », *art. cit.*, p. 18.

(28) AD LECTOREM, 1515, « *Quod si quis sibi volet alios locos vel plures vel exactiores fingere, viam indicauimus in secundo de copia commentario.* », in A. Vanautgaerden, *art. cit.*, p. 41. また *De copia* の方法については J. Chomarat, *op. cit.*, pp. 712-761. また、『格言集』に限らず他の著作においても「ロクス」を体系化しようというエラスムスの意図が見られる。たとえば、1519年に出版された *Ratio seu compendium veræ theologiæ* では神学的主題に関する「ロクス」が恣意的な順番で並んでいるのに対し、1535年の著作 *Ecclesiastes* においては、主題を二項対立にして並べるなど、体系的な神学を構築しようというエラスムスの意図が反映されている。これについては M. Hoffmann, *Rhetoric and Theology : The Hermeneutic of Erasmus*, Univ. Tronto Press, 1994, pp. 58-59.

(29) AD LECTOREM, 1528, « *Ex hoc indice quo plus capias fructus, catalogus titulorum iuxta congruentiam ac pugnantiam sententiarum digestus, erit semel atque iterum non indiligenter perlegendus.* », in A. Vanautgaerden, *art. cit.*, pp. 44-45. 実際、格言を検索するためにはこれらの索引を組み合わせながら徹底的に利用しなければならなかった。Blair, *op. cit.*, p. 136 et 141.

(30) A. Vanautgaerden, « L'index thématique des *Adages* d'Érasme », in *Les instruments de travail à la Renaissance, Nugæ Humanisticæ*, n° 10, 2010, pp. 241-280 は「ロクス」の古代からの意味の変容を追い、それがエラスムスにあっては「見出し語」となり、引用文の貯蔵庫としての役割を持つと論じた後で、そうした見出し語の索引を使ってエラスムスは、読者にモラルに関する教訓を与えようと誘導していると明らかにした。だが、1508年以降の『格言集』は大判で内容量も多いがゆえに忌避されがちであり、むしろその摘要が欧州各地の出版者によって作成され、人気となった。とはいえ、『格言集』の魅力は疑いえないものであり、それについての Vanautgaerden の結論を引用しておく。P. 267, « Ce recueil de proverbes est un labyrinthe où l'on ne craint pas de se perdre, car l'on pressent que chacune de ces impasses mène au plaisir ».

このように、『格言集』にあってゲッリウスの遺産は副次的な位置にとどまる。この著作はむしろ読者に情報管理の方法論を教える見本なのだ。しかし、読書録的な多彩な知識の宝庫としての面白さや体系的に整理された集成にはない魅力があるからこそ、『格言集』はこの時代のベストセラーになったのだといえよう<sup>(31)</sup>。

### 3. モンテーニュの多様性

#### 読書録の延長

「読書録」が流行していたまさにその時期にモンテーニュは彼の『エッセー』を書いていただけでなく、その影響下にあったであろうというヴィレールの指摘は正当である<sup>(32)</sup>。たとえば著作のレイアウトに目を向けてみると、章タイトルの後に区切りもなくテキストが続いていく様子や、ところどころ引用が差し挟まれるのも、同時代の「読書録」と見た目の点では同じである。とりわけ、I-52「古代人の儉約について」では、セネカやプルタルコス、ワレリウス・マキシムスからの範例の引用が章タイトルのテーマに沿って並べられているのが確認できる。またII-22「駅馬について」においても同様である。ここでは「駅馬」という見出し語ないしトピックに関する範例が並べられているだけである。いずれの場合もモンテーニュ自身の考察や脱線などは含まれないが、一つのテーマのもとに関連した範例が集合する様子は読書録のそれと非常に近いものであるといえよう<sup>(33)</sup>。

また、語られている題材もモラルに関するもの（死や悲しみ、怒りや勇気など）や政治・外交に関するもの<sup>(34)</sup>、不可思議な出来事についてなど多種多様といってよく、各章のつながりも、ところどころ連続したものがあるにせよ、基本的には断続的である。

さらに、すでにCatherine Magnienが見事に示したように<sup>(35)</sup>、モンテーニュは初期の『エッセー』

---

(31) 実際、1500年の初版から十七世紀の終わりまでに163版を重ねた。

(32) P. Villey, *Les Sources et l'évolution des Essais de Montaigne*, 2vol., Paris, Librairie Hachette & Cie, 1933 (2<sup>e</sup> éd.), vol. 2, pp. 24-27. 『エッセー』の引用は次のエディションから行う。*Les Essais*, texte établi et annoté par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2007.

(33) Cf. *Les Essais*, op. cit., p. 1485. I-52についての注で編者は次のように指摘している。「On y retrouve le système de la "leçon" : un thème auquel s'agrègent avec le temps des exemples glanés chez les historiens grecs et latins, mais aussi chez Sénèque. » また「要録 *chreia*」と似た語り方をしているのが、I, 40/14であり以下のように指摘されている。「À la manière des chries, sorte de dissertations pratiquées depuis l'Antiquité et appuyées sur de nombreux exemples, ce chapitre est un commentaire sans cesse reconduit de la sentence initiale [...]. » (*ibid.*, p. 1451)

(34) この点については次のものを参照。とりわけ第一巻の前半は政治、軍事、外交にかんするテーマがまとめられている。これにはモンテーニュ自身の政治的意図があったのではないかと考えられている。George Hoffmann, *Montaigne's Career*, Oxford, Clarendon Press, 1988 ; P. Desan, « Les politiques éditoriales de Montaigne », in *Montaigne Politique, Actes du colloque international tenu à University of Chicago (Paris) les 29 et 30 avril 2005*, réunis par Philippe Desan, Paris, Honoré Champion, 2006, pp. 263-286.

から最晩年の加筆に至るまでゲッリウスの『アッティカの夜』を何度も読み、利用していた痕跡が認められ、序文においてみずからの立場を控えめに呈示する姿勢や、一般的なレトリックの配列を拒否し、偶然のなりゆきに任せる点、また著作の構成を章立ての形式にするアイデアなど『エッセー』とゲッリウスの作品を接近させることも十分に可能である。他方、作品の評価という観点から見れば、後世の人々は『エッセー』の構成の断片性と題材の多様さを強調し、とりわけラ・クロワ・デュ・メヌやゲ・ド・バルザックなどはプルタルコスやセネカと関連づけながら『エッセー』の読書録の特徴を評価した<sup>(36)</sup>。モンテーニュも自身の文体について、「私は分別なく無秩序に変化に走る。私の文体と精神は同じようにさまよう<sup>(37)</sup>」と開き直る。そしてみずから理想とする、飛び跳ねるような文体をプルタルコスのなかに見出し、「この浮かれた跳躍と変化はなんと美しいことか。しかも無頓着で偶然に見えれば見えるほど一層美しい<sup>(38)</sup>」と評価する。こうした主題の多様さ、偶然的で無頓着な文章の流れなど、多くの点で『エッセー』を雑録、あるいは読書録に近づけることができる。

では、モンテーニュの作品を読書録から区別する決定的な特徴はどこにあるのだろうか。それを探るために、我々は『エッセー』の作品全体ではなく、章の規模において考察を試みたい。

たとえば、非常によく読まれたペドロ・メシアの読書録から、第一卷17章「人が死ぬときの状態如何によってその死が良いか悪いか判断すべきであること、その多くの例」を取り上げてみたい<sup>(39)</sup>。まず導入では、死がいつ、どんな場所で、どのように起こるかわからない以上、それが不運なものかどうかは判断できない、と述べられる。次いでアウルス・ゲッリウス、ワレリウス・マクシムスなどの古代の範例集成や、同時代の範例のコレクションなどから、珍しい死に方をした例が並べられる。とくに主題全体に対するメシアの見解や結論などが述べられるわけでもなく、

(35) C. Magnien-Simonin, « Montaigne et Aulu-Gelle », in *BSAM*, VII<sup>e</sup> Série, n° 41-42, 1995, pp. 7-23.

(36) こうした後世の評価について M.-D. Couzinet, « Les *Essais* de Montaigne et les *Miscellanées* », in *Ouvrages miscellanées et théories de la connaissance à la Renaissance. op. cit.*, pp. 161-166で論じられている。また次の論文も有益。J. Brody, « La première réception des *Essais* de Montaigne : fortunes d'une forme », in *L'Automne de la Renaissance 1580-1630, op. cit.*, pp. 19-30.

(37) III, 9, 1041, « Je vois au change, indiscrettement et tumultuairement : mon stile, et mon esprit, vont vagabondant de mesmes », また « tumultuairement » という語をめぐって, J. M. Chatelain, *art. cit.*, p. 181, n. 42では、これは « *sermo tumultuarius* » という「雑録」の著者たちに共有されたトピックであり、モンテーニュはゲッリウスなどから直接知っただけでなく、彼の師チュルネーブを介して学んだ可能性が高いと指摘されている（チュルネーブはロピタル宛の献呈文のなかで自著を紹介した際に « *tumultuaria scriptura* » と言っている *supra*, n. 14）。ただしモンテーニュは雑録を想定しているのではなく、詩を想定してこの語を用いている。

(38) III, 9, 1041, « Ô Dieu, que ces gaillardes escapades, que ceste variation a de beauté : et plus lors, que plus elle retire au nonchalant et fortuit! » ここでも「無頓着」、「偶然さ」などの雑録を形容する語彙が詩的散文のために用いられているのが見て取れる。

(39) *Les Diverses leçons, avec trois dialogues dudit auteur, contenant variables et mémorables histoires, mises en français par Claude Gruget [...] augmentées, outre les précédentes impressions, de la suite d'icelles, faite par Antoine Du Verdier*, Lyon, Barthelemy Honorat, 1577, I, XVII, pp. 75-78.



章は閉じられ、また各範例どうしになんらかの論理的つながりがあるわけでもなく、記述も一貫したものではない。

これに対して『エッセー』第一巻18章「我々の幸福は死後でなければ判断してはならないこと」を取り上げてみよう<sup>(40)</sup>。これはメシアのものと同じテーマについて論じたものである。このテーマ自体、古代以来よく知られたソロンの警句、「人間は最後の日が過ぎないかぎり、幸せかどうか言うことができない」に発している。この句はアリストテレスやプルタルコスなどの古代の著者たちをはじめ、エラスムスやリュコステネスといった人文主義者たちにとってもお馴染みのものであった。モンテーニュはまず、このテーマをオウィディウスの詩句を引用して示し、次に、ソロンの警句についての説明、そしてプルタルコスなどから同様の範例の引用をおこなう。ここまではメシアの記述と、範例の羅列という点では大差ないが、モンテーニュはそこからソロンの警句の解釈を哲学、あるいはモラルの方向に発展させる。つまり、人間の生はその最後の瞬間の行為を見ないことには判断できず、死がその人生の価値をはかる試金石となる、というものだ。したがってモンテーニュも生の評価を死に委ねると意気込む。1580年版のテキストではこの見解によって章が閉じられている。続けて1588年版とそれ以降のテキストを見ると、興味深いことに、モンテーニュは最初の見解を修正している。そこで述べられる範例は立派で落ち着いた死によって、生前の悪い評判を回復した例であり、これは1580年の意気込みをやわらげる。それゆえモンテーニュは、最後の瞬間を立派にすることではなく、平和で静かに人生を終えることを願って章を閉じる。1588年以降の加筆では、プロワで暗殺されたアンリ・ド・ギーズを暗に示し、人生の半ばで急に生命を断ち切られたことによって、より一層彼の生涯は華々しく、気高いものとなったことが脱線的に述べられている。

このように『エッセー』の章では、範例はただ並べられるのではなく、そこにモンテーニュの判断、見解が挿入され、論述が発展していくのが見られる<sup>(41)</sup>。また、テキストの時系列的な展開によって、見解が修正されたり、別の方向へ進んだりすることもある。これこそが『エッセー』の「偶然の配列」である。ここからいえるのは、モンテーニュは乱雑さを生み出そうとしているのではなく、書いているうちに乱雑になっていくということだ。そして「多様さ」にかんして言えば、「読書録」のそれは、一つのテーマに対する変奏 variation であり、似たような範例が次々と引用されることによって成立していたのに対し、『エッセー』における「多様さ variété」は、範例とそれに対するコメント、そして時間とともに変化する見解、つまり一言でいえば、彼の「判断」

(40) Les *Essais*, éd. cit., I, 18, 80-82 et Notes et variantes, pp. 1355-1358.

(41) F. Goyet の指摘によれば、特に第一巻 1 から 6 章にかけて、範例 exemple は単なる逸話の紹介ではなく、一種の論拠としてモンテーニュの論述を証明するのに役立っているという。次の論文を参照のこと。« La démarrage des *Essais* (I, 1-6) : la séduction par les exemples », in *Montaigne : une rhétorique naturalisée ? Actes du colloque international tenu à University of Chicago (Paris) les 7 et 8 avril 2017*, Paris, Honoré Champion, 2019, pp. 57-71.

の多様さにほかならない。この比較によって、『エッセー』は「読書録」から明確に区別されるだろう。多くの人々が『エッセー』に見出した読書録の特徴はいずれもモンテーニュの判断の移り変わりの結果物にほかならない。

\*\*\*

「私の主題を見失うのは不注意な読者であり、私ではない (c'est l'indiligent lecteur, qui perd mon subject ; non pas moy)」(III, 9, 1041)。『エッセー』のなかでモンテーニュは様々な出来事について論じているのではなく、それらを通じて自分の判断を語っている<sup>(42)</sup>。それゆえ豊富な判断であり、主題は常に一つである。そうした判断が集まって形成される章は断片的に見えるが、その根底には実のところ「自分自身」という一貫した主題がある<sup>(43)</sup>。したがってモンテーニュが語る話題の「多彩さ *varietas*」は、彼の判断の「分岐 *divergence*」であり、その集積が『エッセー』における「多様性 *la diversité*」を形成している。

ところで、我々の観点にとっては、この前提が『エッセー』をコモンプレイスブックから区別するのに役立つだろう。なぜなら、事物と解釈の多様性を受け入れることは、それらを一定のカテゴリーに並べたり、選別したものをすでに決められたトピックに割り当てたりすることの拒否を正当化するからである。モンテーニュは次のようにいう。

はたしてこのように雑然として細かく、とりとめのないことを最後までやり通せるのかは知らないが、この無限に多様な事物の様相をいくつかの群にまとめ、我々の定まらない行為を取り押さえ、秩序づけるのは学者たちにお任せする。私は、我々の行為を互いに結びつけるのは難しいと思うのみならず、そのそれぞれを個別的に何かの主要な性質によって適切に名付けることも難しいと思う。我々の行為はそれほどまでに二重で、見る角度によって色が異なるのだから<sup>(44)</sup>。

(42) F. Garavini, « Au 'sujet' de Montaigne. De la leçon à l'écriture du moi », in *Carrefour Montaigne*, Pisa et Genève, Edizioni ETZ, Editions Slatkine, 1994, pp. 63-93では、歴史的範例 *exempla* の扱い方にコモンプレイスブックと『エッセー』の決定的な違いがあるとされる。前者は範例をその後の利用のための素材として並べるが、モンテーニュはそれらを自分の判断を開陳するための素材として扱う。

(43) 「多彩さ」と規則の関係について J. Céard の鋭い指摘を引用しておく。 *La nature et les prodiges*, Genève, Droz, 1977, p. 232, « [...] la variété est régie par un *ordre*. Il faut même dire qu'inversement la variété est nécessaire à l'ordre. Ces deux propositions sont rigoureusement complémentaires : car, dans un ensemble donné, seule l'existence de différences l'empêche de s'abîmer dans la confusion, et seule l'existence d'un ordre des différences le retient de s'effondrer dans le chaos. Tel est le sens plein de la notion de "variété des choses". » 『エッセー』もまた一貫性に欠けているように見えて、その根底には常にモンテーニュ自身の「判断」を記録するという規則があるからこそ、作品として統一体をなしているといえるのではないだろうか。

この見解は、コモンプレイスブック的信息整理の拒否であると同時に懐疑主義の告白としても読めるだろう。多様性を前にして、理性や規則による分類は不確実性しか示さない。こうした人間理性への不信感は、よく知られるように、『エッセー』のなかで最大最長の章 II-12「レーモン・スボン弁護」において最も色濃く表れている。ところで「ロキ・コムーネス」のなかにも懐疑主義と相性が良いものがある。それは事柄を賛否両方の観点から論じるものであり、古典レトリックにおいて見られる修辞方法の一つであるが、『エッセー』の文章をこの論点から読み直すことは可能だろうか。それを問うことが我々の次の課題である。

---

(44) III, 13, 1124, « Je laisse aux artistes, et ne sçay s'ils en viennent à bout, en chose si meslée, si menue et fortuite, de renger en bandes, ceste infinie diversité de visages ; et arrester nostre inconstance, et la mettre par ordre. Non seulement je trouve malaysé, d'attacher nos actions les unes aux autres : mais chacune à part soy, je trouve malaysé, de la designer proprement, par quelque qualité principale : tant elles sont doubles et biggarées à divers lustres. »